

P9-57 肺尖部胸壁浸潤癌の外科治療成績

山川 久美¹・溝淵 輝明¹・山本 直敬¹・藤野 道夫¹・
柴 光年²・門山 周文³

¹国立病院機構 千葉東病院 呼吸器外科；²君津中央病院
呼吸器外科；³さいたま赤十字病院 呼吸器外科

【目的】肺尖部癌は狭小な胸郭出口に位置するため容易に周辺臓器に浸潤して外科治療成績は不良であるうえに，骨性胸郭の切除を要するものは筋肉切断量など侵襲が大きく手術適応は慎重に考慮すべきである。当院の肺尖部骨性胸郭浸潤癌切除例の成績を検討した。【対象および結果】最近10年間に当院で切除された肺尖部胸壁浸潤癌のうち第1肋骨の切除を要した7例を対象にした。男性6例，女性1例。年齢は52才から78才，平均64才。患側は右3例，左4例。腺癌5例，扁平上皮癌2例。最大腫瘍径は4.5～6.5cm。cT3理由は肋骨のみが5例，肋骨および腕頭静脈1例，肋骨および腕神経叢，鎖骨下動脈1例。術前放射線治療が2例に，化学放射線治療が2例に行われた。手術の実際を検討するとアプローチはHook4例，前方3例で合併切除臓器は肋骨（第1，2，3肋骨）7例，腕神経叢1例で，椎体，動静脈切除は無かった。肺切除術式は上葉切除4例，楔状上葉切除1例，部分切除2例。手術時間，出血量はHook（391±64分，497±58g）が前方（477±111分，693±98g）に比べて少ない傾向が認められた。病理学的検索からは完全切除5例，非完全切除2例（肺部分切除断端，胸膜播種）。浸潤臓器は腕頭筋5例，肋間筋および肋骨2例。N2：2例，N0：4例，Nx：1例。転帰は無再発生存2例（64，36ヶ月），癌死3例（遠隔転移再発，14，20，23ヶ月），在院死2例（脳幹部梗塞，膿胸）と不良でN2，非完全切除に長期生存例は無かった。【まとめ】リンパ節転移が無く術前導入治療で完全切除が期待できる症例は外科治療の良い適応となると考えるが，N2リンパ節転移陽性例は遠隔転移再発が高率で手術適応の判断は慎重を要する。

P9-58 肺癌副腎転移手術症例の検討

伊藤 志門¹・福井 高幸¹・佐藤 尚他¹・宇佐美範恭¹・
内山 美佳¹・梶 政洋¹・吉岡 洋¹・森 正一²・

光富 徹哉²・内田 達男³・陶山 元一³・横井 香平¹

¹名古屋大学 医学部 呼吸器外科；²愛知県がんセンター
胸部外科；³県立愛知病院 胸部外科

【目的】肺癌の副腎転移は，臨床上しばしば経験されるが切除にいたる症例は少ない。画像診断の進歩により副腎単独転移が発見されるようになり，切除による長期生存例も散見されるようになってきた。我々の施設で切除された原発性非小細胞肺癌の副腎転移症例を追跡し，その予後を検討するとともに文献的考察を加え報告する。【対象】2004年6月までに名古屋大学内内分泌外科にて切除された原発性肺癌副腎転移6症例（原発巣の肺癌は1例をのぞき他施設にて完全切除）。【結果】男性5名，女性1名，年齢35～73歳（中央値61.5歳）。組織型は腺癌3例，扁平上皮癌1例，腺扁平上皮癌1例，未分化型1例で，原発巣切除時の病理病期はI/II/III=1/1/4であった。原発巣切除から副腎切除までの期間（DFI）は49～1261日（中央値326日）で1年以内の症例は4例であった。副腎摘出は1例を除き腹腔鏡下で行われ，摘出腫瘍径は20～120mm（中央値50mm），術後在院期間の中央値は7.5日であった。4例が再発死亡しており，2例が担癌生存中であり，副腎切除部局所への再発は2例に認められた。原発巣切除後の生存期間は175～1652日（中央値988日），副腎切除後は126～1325日（中央値354日）であった。【考察】Abeezarらは副腎転移症例の41例（うち肺癌23例）の切除後5年生存率は29%，生存期間中央値は860日，DFIが予後因子となると報告している。我々の症例では5年生存例はなく，生存期間も中央値354日と比較的短かった。その原因として，原発巣の進行度や短いDFIが影響している可能性があると思われた。【結語】肺癌副腎転移に対しては，手術適応症例を選択すれば，生存期間を延長できる可能性はあるが，根治可能症例を選択することは難しいと考える。